

優秀賞



知層

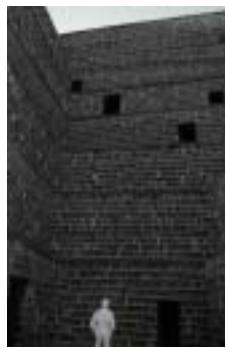
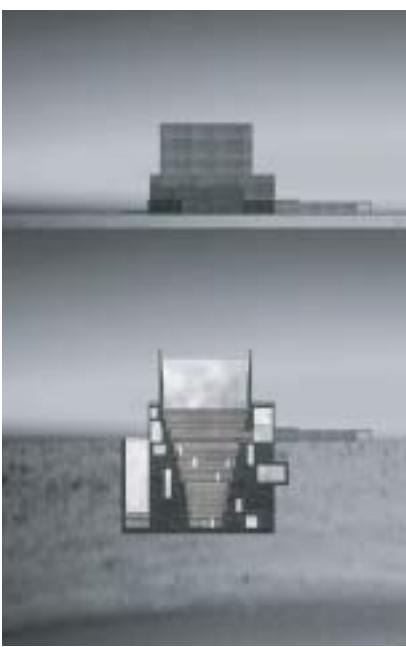
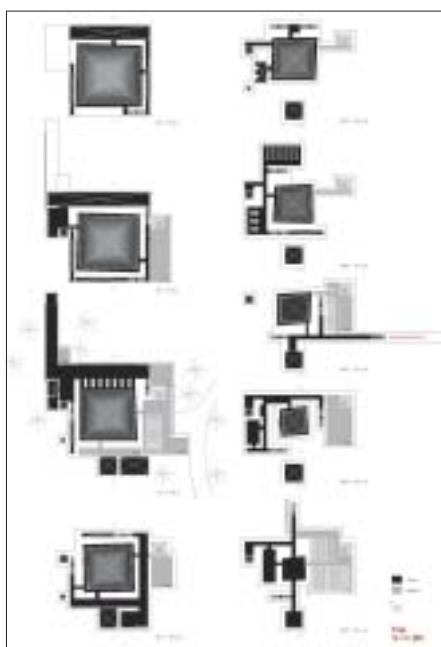
体験としての図書館

石川 智行 (いしかわ ともゆき)

千葉大学 工学部 デザイン工学科



トウキョウは日々軽さを増し、浮遊している
どこまでが現実でどこまでが虚像なのか
実体が掴みにくいトウキョウは人々にどう映るのか
トウキョウたらしめるものはいったい何か
線で発展をしてきたトウキョウ
その最たるものひとつが鉄道ネットワーク
綿密、正確、高速
この誇るべきリアルネットワークを利用し
めまぐるしく変わるトウキョウに似合った
流れのような文化流を発生させる
その文化流はさまざまなトウキョウを映し出す
鉄道コンテナが文化流の媒体となり
無機質な駅のホームやまちなかに流れしていく
あたりに好奇心がちらばる
文化流はすれ違う人々の目に留まり
トウキョウの様々な姿(文化)を伝える
TOKYO ACCELERATORは文化流の源泉
そこでは人々が思い思いに活動し
創造が行われ続ける場所
それは品川の人工島から
トウキョウを動かし続ける



[講評] 私は君が、日頃乗客が車内で読書をしている事に着目し、駅に書架を設け、車内を閲覧室とすれば地下鉄がカバーする広大なエリアが図書館になる、というとてつもない巨大地下ネットワーク図書館の発想に魅力を感じた。それで充分完結しているのだが欲張って、日比谷図書館を建て替えて情報管理の要としつつ、そこにエリア内で除籍される膨大な書物を集め、気の遠くなる程垂直に配置し、見たことは無いがアレクサンドリアか

はたまたローマのピラネージ的吹き抜け空間と見紛う様な神秘的空间を実現しようというのだ。この「神秘性」というのが曲者で、突き詰めると宗教性にリンクしてゆき、奈落の底まで付き合わされるハメになる。これほどややこしい垂直的神秘的テーマと水平的地下ネットワークシステムをどう繋ぐか？その必然性を如何にアピール出来るか。その関係が着眼点になってくる。

(審査員：沼田正雄)